

点字開発者ルイ・ブライユに学ぶ

金子和夫 順天堂大学医学部整形外科科学講座

Kazuo KANEKO

パラリンピックで視聴覚障害者が行うスポーツは団体では5人制サッカー、ゴールボールが、個人では水泳・柔道・自転車・ボート・カヌーやトライアスロンまで参加対象となっている。トライアスロンに至っては、健常者と障害者が同じレースで競い合う場合もある。なかでもリオパラリンピックで初めて実施された視覚障害者マラソンで、3時間6分52秒の記録で銀メダルに輝いた道下美里選手には驚かされた。リオパラリンピックでの視覚障害者たちの活躍は鮮明な印象を残した。

少し整形外科から離れて、点字について述べようと思う。現在世界中で用いられているのはBraille 6点式点字法で、フランス人のLouis Braille(ルイ・ブライユ、1809~1852)が16歳(1825年)で考案した点字法である(日本ではまだ江戸時代末期!)

ルイはパリ郊外の村の馬具職人の家に生まれ、3歳時に仕事場で遊んでいて目を負傷し、5歳で全盲になる。しかし教育熱心な両親の下で村の小学校に通い、優れた記憶力を持つルイの成績は常にトップだった。そして両親・神父・校長・領主が全力を尽くし、10歳で奨学金を得てパリにある王立盲学校に入学、寄宿生となる。ここでも全科目で頭角を現し、またピアノ教育を受けたことは後に大きな財産を残すこととなる。

この学校では創立者バランタン・アユイが考案したアルファベットの形を浮き出させた線文字が使われていたが、1つの文字が読むには大き過ぎ時間がかかるうえに、盲人自身が書くことができないという欠点があった。1821年、夜間書法を案出した砲兵大佐シャルル・バルビエが来校した。これは暗闇での兵士間の一種の暗号での情報伝達法だが、バルビエはそれを盲人のために改良し、フランス語の音を12の点と線の組み合わせで表したソノグラフィーを考案した。しかし、これは音を表すのみで、綴り・句読点・数字・数学記号・楽譜などを表わせない。ブライユは触読しやすいように点を減らし、文字そのものを表すように工夫を重ね、1825年に6点による点字を考案した。改良を続け、2年後に点のアルファベットを使って文法書を作成、1829年には「点を使って言葉・楽譜・歌を書く方法」を出版した。1837年に現在も使われているブライユ点字(英語読みではブレイユ)が完成した。

ブライユは、晩年は盲学校教師・教会のパイプオルガン演奏者などを務め、1852年に肺結核のため43歳で死亡している。その2年後にブライユ点字はフランスで公式点字として採用された。欧米各国へも普及し、1878年に国際会議でブライユ点字が最上の方法と認定された。日本語にも翻案されて、1890年(明治23年)に正式に採用された。1929年にはブライユ点字による楽譜も国際的に採用された。

ブライユ点字により、それまでほとんど不可能と考えられていた盲人自身での文章の読解と記述

が可能になった。盲人が点字を読み書きする速度は、一般の人が普通の文字を読み書きする速度と比べてほとんど遜色なくなった。6点を組み合わせた、たった63通りの形が基本だが、多くの言語・多種の記号体系に適用され、盲人のあらゆる情報の正確なやりとりを可能にしている。

ブライユは生誕の村に埋葬されたが、死後100年の1952年に遺骸は偉人たちが眠るパリのパンテオンに移された。しかし両手は今でも故郷に残されている。生家は点字博物館として公開されている。

宇都宮大学工学部の研究で、視聴覚障害者は静的二点識別法で19カ所の測定部位において晴眼者より有意に低値を示した。つまり後頭葉を触覚による情報処理に活用させ、より鋭い触覚を獲得したと推察している。

幼少期の不運が、ブライユの人生を大きく狂わすことになったはずだが、並外れた才能と努力から得られたその業績は、視覚障害者だけでなく、われわれの現代社会にも光明をもたらしたことは間違いない。視覚情報に支配された現代社会において、200年を経ても活躍し続ける点字同様、整形外科の仲間たちにも温故知新、困難な状況においても挑戦し続ける精神を持ち続けてほしいと願っている。